

金剛萱遺跡の旧石器文化9－2024－

Palaeolithic Culture of the Kongogaya site in Gunma Prefecture, 9, 2024

金剛萱遺跡研究会^{*1}

Kongogaya site research group

キーワード：後期旧石器時代初頭、石器、発掘、無斑晶質安山岩、石器製作場所

Key words : Earliest Upper Palaeolithic, stone tool, excavation, aphyric andesite, stone tool making site

はじめに

金剛萱遺跡は群馬県甘楽郡下仁田町大字青倉にあり、独立峰の標高 788 m の金剛萱の頂上より一段下にある緩斜面地に所在する遺跡である（第1図）。金剛萱遺跡は2007年から地質調査が始まり、コンニャク畑地点は2009年に旧石器～縄文時代の遺跡と確認された（金剛萱遺跡研究会ほか編 2014）。コンニャク畑地点より標高が高い林道地点は、2011年に調査が開始され2023年までに15回の発掘と地質調査が実施されている（金剛萱遺跡研究会 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 2023, 2024）。その後、2024年4月26日～30日に第16回の発掘調査を行った（野口・金剛萱遺跡研究会 2024；両角・金剛萱遺跡研究会 2024）（第1表）。

この地点は、金剛萱の山頂から続く稜線のすぐ北側に大規模地滑りで形成された窪地があり（大規模地すべり研究会 2016）、その南端付近に突き出した小丘陵の西端の微高地に立地する（第3図）。国土地理院の電子国土 WEB から読み取った調査地付近の標高は、コンニャク畑地点が 680 m、林道地点が 695 m である。本稿は、2024年発掘調査の概要を報告する。

2024年発掘調査地の状況と調査の概要

発掘地（林道地点）は、青倉金剛萱1031番地にあり、針葉樹の植林地の中にある。広いコンニャク畑（コンニャク畑地点）の南側にあたり、未舗装の作業道の敷地である。この場所では作業道は原地形をかなり削って通っていて、道路面は掘削された場所で、下仁田ローム層上部（関東火山灰グループ 2009）が露出している。したがって、道路面をそれほど掘削しなくても目的とする AT 層直下の暗色帯を調査できる状況となっていた。

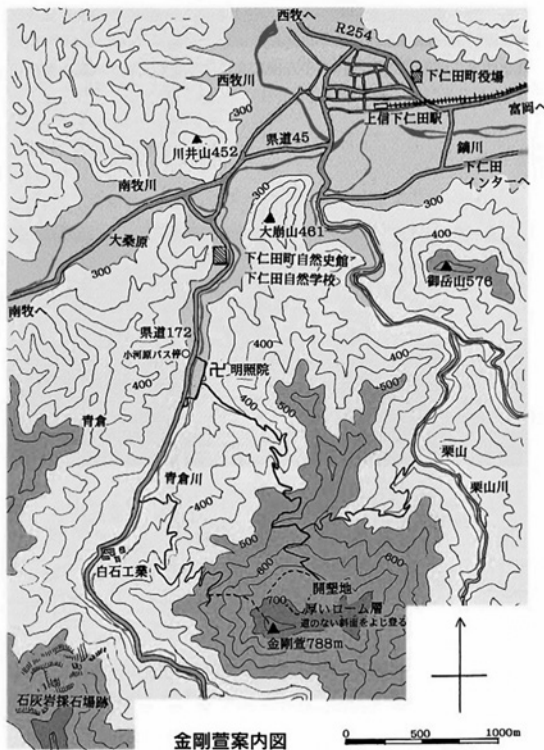
発掘地における地質層序は、作業道部分では地表からかなり削平されている状態であった。上位より表土と黒色火山灰土層が 0～20 cm、10～20 cm黄褐色ローム層、0～20 cm明褐色軽石層（浅間板鼻褐色軽石：BP）、20 cm暗黄灰褐色ローム層、13 cm褐色軽石層（浅間室田軽石：MP）、10 cm黄灰褐色ローム層、3 cm±黄灰色ガラス質細粒火山灰層・レンズ状（始良 Tn 火山灰 AT）、15 cm黄灰褐色ローム層、10 cmやや暗色の黄灰褐色粘土質ローム層（暗色帯）、4 cm±灰白色軽石・黄褐色軽石まじり灰褐色細粒火山灰層（Yt-pm4）、25 cm黄灰褐色ローム

2025年2月19日受付。2025年3月10日受理。

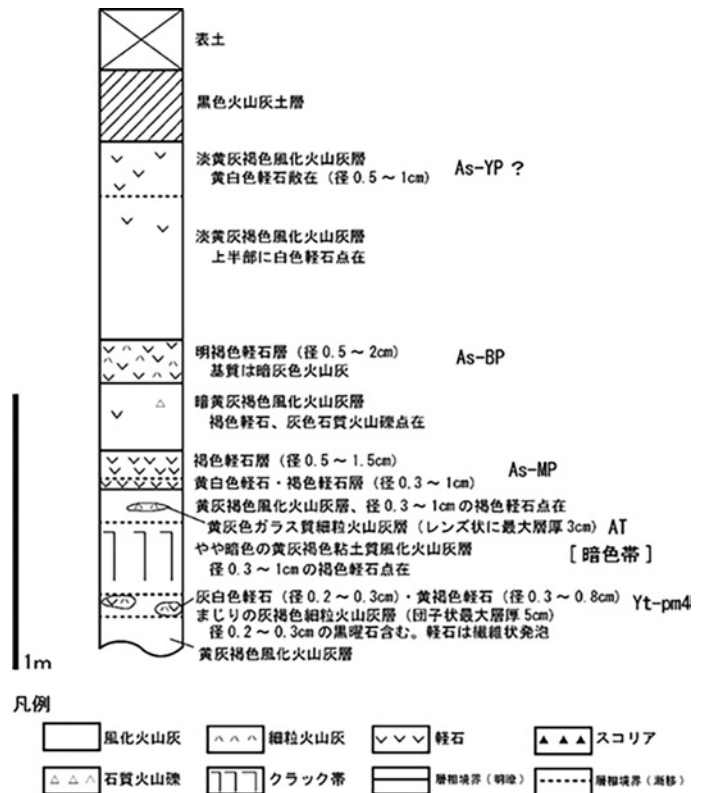
^{*1} 事務局：〒370-2611 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1 下仁田町自然史館 中村由克 気付
c/o Yoshikatsu Nakamura, Shimonita Museum of Natural History, 158-1, Aokura, Shimonita-machi, Kanra-gun, Gunma, 370-2611 Japan
執筆者責任者：中村由克（naka-m@opal.plala.or.jp）

第1表 金剛萱遺跡林道地点の調査経過

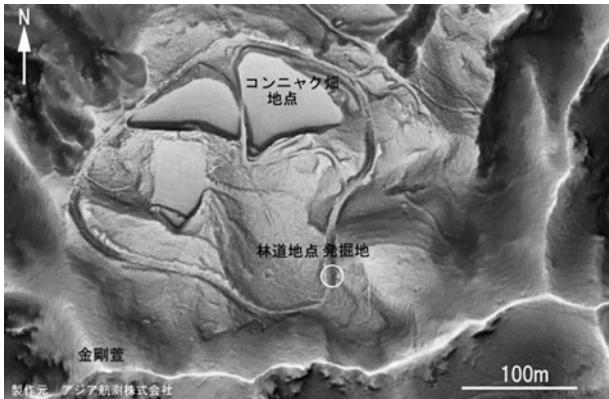
回	期間	人数	出土点数	人工品	おもな出土品
第1回	2011.9.23-25	17	21	10	剥片, 石斧調整剥片?
第2回	2014.11.22-24	21	11	4	局部磨製石斧, 剥片
第3回	2015.11.21-23	37	10	6	剥片, 石斧調整剥片?
第4回	2016.4.29-5.1	21	12	10	剥片
第5回	2016.10.29-30	9	7	5	削器, 剥片
第6回	2017.4.28-30	17	16	15	折断剥片, 剥片
第7回	2017.10.28	6	5	5	折断剥片, 剥片
第8回	2018.4.28-30	25	23	19	折断剥片, 剥片, 碎片
第9回	2018.10.27-28	8	2	2	折断剥片, 剥片
第10回	2019.4.27-29	21	35	34	折断剥片, 剥片, 碎片
第11回	2019.8.31-9.1	11	7	7	二次加工剥片, 折断剥片, 剥片
第12回	2020.10.2-4	10	19	17	折断剥片, 剥離痕のある剥片, 碎片
第13回	2022.11.18-20	15	7	6	尖頭形剥片, 剥片
第14回	2023.4.28-30	21	28	27	剥片
第15回	2023.10.20-22	12	55	50	剥片, 石核
第16回	2024.4.26-30	19	35	33	剥片, 石核
		270人	293点	250点	
	期間	人数	場所	主な調査内容	
調査	2015.4.11-12	27	金剛萱	試掘調査, ハンドオーガー調査, 地すべり調査	
	2017.9.23-24	9	馬山、町内	遺跡分布調査, 段丘分布調査	
	2024.10.5-6	10	金剛萱、町内	遺跡周辺調査, 段丘分布調査, 接合資料観察	



第1図 金剛萱遺跡林道地点の位置



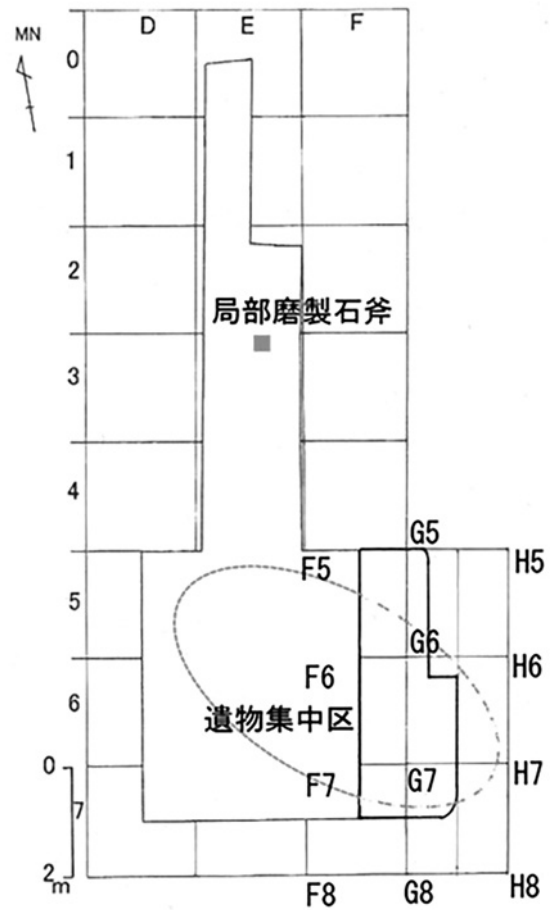
第2図 金剛萱遺跡林道地点の地質柱状図



第3図 金剛萱遺跡周辺の赤色立体地図



第4図 遺物集中区の発掘終了時点の状況



第5図 金剛萱遺跡林道地点の調査位置図

層という層位である（第2図）。

剥片等の遺物は、このAT層準から下位の暗色帯付近から多く出土しており、特にYt-pm4の層準付近が安山岩石器群の生活面とみられる。

2024年発掘調査の経過

第16回発掘調査は、2024年4月26日～29日の4日間（後片付けは4月30日まで）で、参加者は19名であった。期間中は晴天で、調査は順調に進められた。

2022年からは従来の作業道の道路部分から東の山側にグリッドを拡張して設定した。グリッドは2m単位で、F5、F6グリッドとF7グリッドの東半分とさらにG6、G7グリッドの西半分の5m×1mと3m×1mを中心とした合計9㎡である（第5図）。

2024年の調査は、2022年以降の場所を引き継いで、より下層の調査を行った。引き続きローム層を手掘りで丁寧に掘削した。今回、Yt-pm4層準の下位まで掘削して、ほぼ遺物包含層を掘り切ることができた（第4図）。今回も前回同様に年代測定用の炭化物は得られなかった。遺物は無斑晶質安山岩製の剥片等35点が出土した。

なお、遺物の垂直位置は、第1回発掘以降、調査グリッド北西端のA杭（E0より1m南）を基準として、+200cmにレベルを設定して発掘地および出土品の位置を計測している（金剛萱遺跡研究会2017）。今回の発掘では、遺構は出土していない。調査区のほぼ中央部にあたるF6、F7、G6、G7の4グリッドにかけて南北2.5m、東西1.5mの範囲に無斑晶質安山岩製の遺物密集区が検出された。

出土した遺物

第16回発掘調査では、遺物集中部を中心に無斑晶質安山岩製の石器など34点が出土しており、その内訳は、剥片21点、石核1点、碎片10点で、そのほか礫と大きな方形礫各1点があった。さらに調査終了後、埋戻し中に玉髓製の剥片1点を表採した。また、水洗選別を実施し、28点の無斑晶質安山岩製の碎片を回収したため、総数は、64点となる。

第16回発掘で出土した主要な石器を示す（第6図）。計測にあたり主要剥離面のわかるものについては剥離軸を基準に計測を行なった（第2表）。主要剥離面が明確でない碎片などについては最大長を基準として計測を行なった。計測値はすべて見通しにおける値である。実測図には掲載番号と括弧内に遺物番号を付した。

- 1：剥片、打面は礫面、背面に求心状の剥離面が見られる。
- 2：剥片、上部を欠損している。背面は多方向からの剥離で構成されている。
- 3：剥片、背面は複数の剥離面が見られる。
- 4：切断剥片、打面は節理面、背面は腹面と同方向の剥離と反対方向の剥離が見られる。
- 5：剥片、打面は礫面、背面は多方向からの複数の剥離面が見られる。
- 6：切断剥片、打面は平坦面、背面は腹面と同方向の剥離と反対方向の剥離面が見られる。
- 7：石核、背面、腹面ともに多方向の打撃で複数の幅広剥片を剥離している。
- 8：剥片、打面は節理面、背面は多方向からの打撃による剥離面が見られる。
- 9：剥片、打面は平坦面、背面は、複数の剥離面が見られる。
- 10：剥片、打面は、礫面、背面は、腹面と同方向の剥離面が見られる。
- 11：剥片、打面は平坦面、背面は腹面と同方向の剥離が見られる。
- 12：剥片、打面は平坦面、背面左側縁の礫面と平坦面を打面として3枚の剥片を剥離している。
- 13：剥片、打点部を欠損する。背面に礫面を大き

く残し、一部で剥離面が見られる。

14：剥片、打面は礫面、背面は礫面を残し、複数の剥離面が見られる。

石材は、1～13が無斑晶質安山岩、14は玉髓である。剥片剥離の特徴としては、打面調整があまり行われず、礫面や平坦打面によるやや厚めの幅広で寸ぶまりの剥片剥離が行われていること、定型的な石器完成品がなく、剥片等が中心であるという前回までの調査で確認されている特徴と同様である。

（水洗選別）

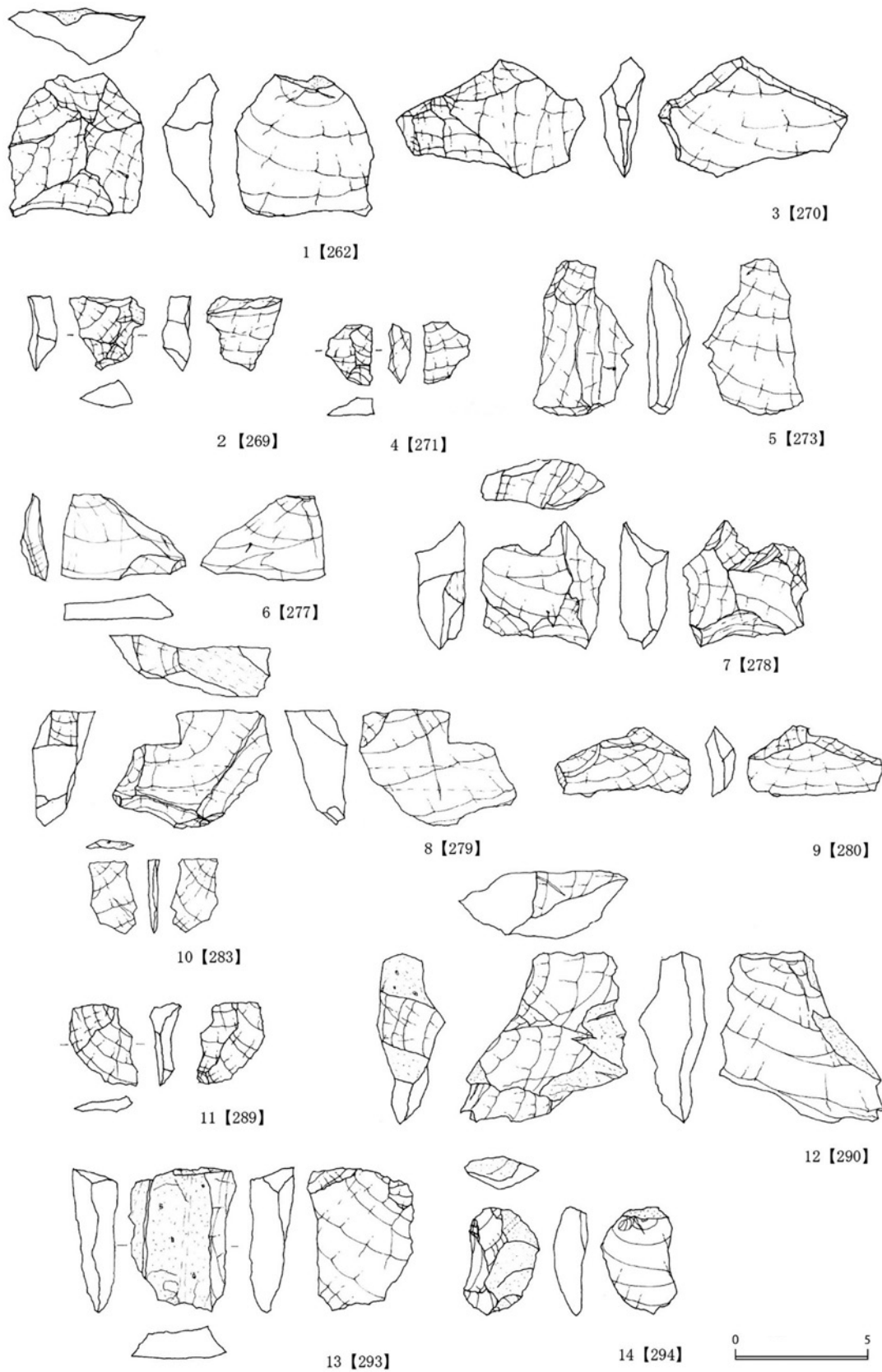
第16回発掘では、炭化物や碎片などのサンプリング困難な微細遺物の回収を目的に水洗選別を行った（第2表）。遺物集中部であるグリッドF6の遺物包含層のローム（土嚢袋4袋）を採取し、フルイと水洗による選別・抽出を行った。フルイは2mmメッシュのものをを用いた。手順としては、フルイに入れたロームをテンバコにはった水の中で攪拌し、ダマは、指圧やブラッシングで取り除き残ったものをテンバコに入れた。回収したロームには礫が多数含まれていたため、テンバコに入れたものの中から遺物を選別した。浮遊物は1mmメッシュのフルイで回収した。

水洗選別の結果、新たに碎片28点を回収した。石材はすべて無斑晶質安山岩である。炭化物の回収には至らなかった。

遺物の空間的分布

これまでの発掘調査において石器の出土層準は、始良 Tn 火山灰（AT）を含む層から下位の暗色帯付近にかけてみられ、特に Yt-pm4を含む灰褐色細粒火山灰層において大型の剥片類や石核、台石等が出土している。Yt-pm4の噴出年代は約34,000～35,000年前と推定されており（下岡ほか 2023）、石器群は後期旧石器時代前半期のものとして層位的にも明確に位置付けられている。

今回、石器の集中部の最下層まで調査が終了した。林道地点の出土石器の数は過去の調査を含めると合計293点（自然石を含む）にのぼり、接合作業を行なった結果、約70点の接合が確認された（2024年8月時点）。そのため、過去調査の記録を含む石器



第6図 第16回発掘出土遺物の実測図

第2表 金剛萱遺跡・林道地点第16回発掘出土の遺物一覧

No.	図版	遺物番号	分類	遺存状態	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重さ(g)	深度(cm)
1		kon_260	碎片		無斑晶質安山岩	10.6	12.5	2.4	0.1	172
2		kon_261	剥片	上部欠損	無斑晶質安山岩	14.2	25.1	10.0	3.1	170
3	1	kon_262	剥片		無斑晶質安山岩	44.0	41.3	17.2	26.8	141
4		kon_263	剥片	左縁辺部欠損	無斑晶質安山岩	42.6	35.6	20.1	26.8	182
5		kon_264	碎片		無斑晶質安山岩	12.2	22.7	8.6	1.2	171
6		kon_265	碎片		無斑晶質安山岩	11.5	10.1	2.9	0.3	172
7		kon_266	碎片		無斑晶質安山岩	5.4	8.6	2.0	0.1	171
8		kon_267	碎片		無斑晶質安山岩	13.0	18.8	6.0	1.3	170
9		kon_268	碎片		無斑晶質安山岩	16.6	6.6	6.6	0.8	175
10	2	kon_269	剥片	上部欠損	無斑晶質安山岩	27.3	29.5	11.0	6.4	183
11	3	kon_270	剥片	打点部欠損	無斑晶質安山岩	38.2	60.7	14.2	24.2	181
12	4	kon_271	剥片	左縁辺部欠損	無斑晶質安山岩	22.8	17.3	6.4	2.5	171
13		kon_272	剥片	上部欠損	無斑晶質安山岩	35.9	45.4	26.2	42.9	178
14	5	kon_273	剥片	打点部欠損	無斑晶質安山岩	59.2	40.0	16.2	30.5	176
15		kon_274	剥片	上部欠損	無斑晶質安山岩	19.2	25.1	10.3	4.2	175
16		kon_275	剥片		無斑晶質安山岩	24.4	30.4	11.0	6.0	174
17		kon_276	剥片	打点部欠損	無斑晶質安山岩	67.2	55.6	16.0	48.9	172
18	6	kon_277	剥片	左縁辺部欠損	無斑晶質安山岩	49.0	55.6	21.6	45.1	169
19	7	kon_278	石核		無斑晶質安山岩	42.8	48.2	20.5	40.2	166
20	8	kon_279	剥片	左縁辺部欠員	無斑晶質安山岩	43.5	62.0	16.3	39.6	165
21	9	kon_280	剥片	完形	無斑晶質安山岩	26.8	50.8	11	13.3	166
22		kon_281	碎片		無斑晶質安山岩	24.6	10.2	8.4	2.3	169
23		kon_282	碎片		無斑晶質安山岩	17.4	8.4	5.6	0.4	188
24	10	kon_283	剥片	完形	無斑晶質安山岩	34.6	21.8	4.8	3.6	193
25		kon_284	剥片	上部・下部欠損	無斑晶質安山岩	14.6	17.8	5.5	1.7	184
26		kon_285	碎片		無斑晶質安山岩	11.9	9.5	2.6	0.3	185
27		kon_286	剥片	打点・左縁辺部欠損	無斑晶質安山岩	43.7	46.2	15.3	28.2	186
28		kon_287	碎片		無斑晶質安山岩	8.7	6.5	3.6	0.1	189
29		kon_288	剥片		無斑晶質安山岩	52.4	42.8	20.1	52.3	181
30	11	kon_289	剥片	完形	無斑晶質安山岩	32.2	27.6	13.3	5.4	181
31	12	kon_290	剥片	完形	無斑晶質安山岩	67.1	60.6	21.6	64.8	180
32		kon_291	礫	—	—	53.0	31.5	12.5	25.2	181
33		kon_292	方形礫	—	—	—	—	—	—	—
34	13	kon_293	剥片	打点部欠損	無斑晶質安山岩	53.6	40.7	17.2	40.8	195
35	14	kon_294	剥片	完形	玉髓	40.5	26.8	12.4	11.8	—

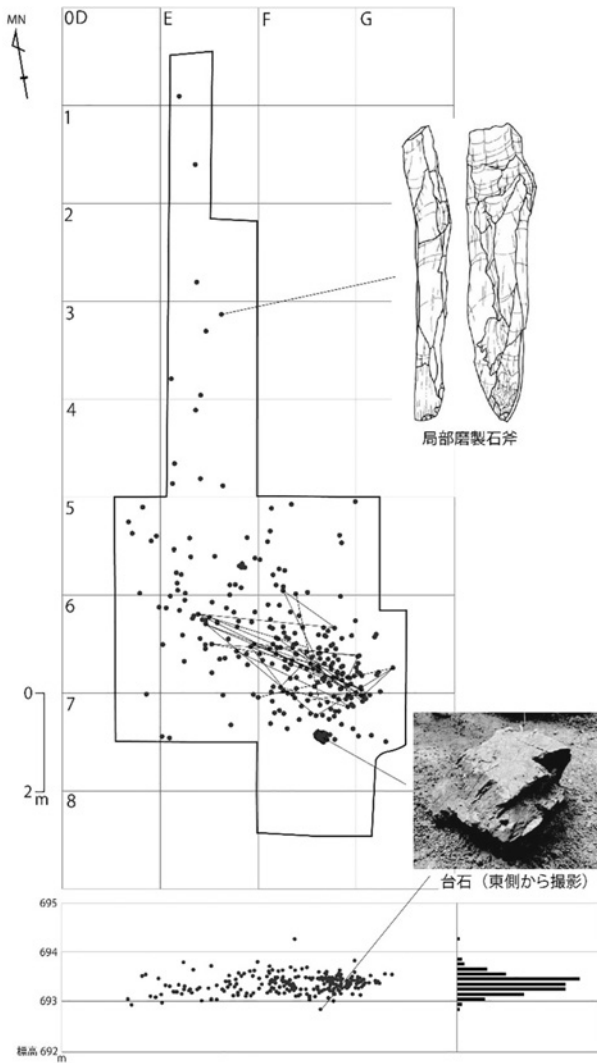
(水洗選別造物)

	分 類		計	備 考
	剥片	碎片		
グリッド F6	0	28	28	石材はすべて無斑晶質安山岩

の平面・垂直分布を改めて作成した（第7図）。併せて石器の接合関係についても検討を行なった。まず、平面分布では、台石を南限としてその北側に石器集中部が認められ、西側にまばらな分布が広がっている。石器の接合関係を棒線で示したところ、台石付近から北西方向への接合関係がみられる。石器集中部の散布状況については、地形の傾斜方向に沿って石器が転がった可能性もあるが、石器製作時に散布した状況がそのまま保存されている可能性もある。垂直分布では、概ね標高 693 m から 694 m

にかけて広がり、標高 693.5 m の位置に高密度な分布を示す。

このようなことから金剛萱遺跡林道地点の旧石器資料は、極めて一括性が高く、旧石器時代当時の石器製作の痕跡を良好な状態で残していたといえる。出土石器のほとんどは、無斑晶質安山岩製の石核や剥片類で構成されているが、特異な石器としては、緑色岩製の局部磨製石斧1点と、最下層の石器集中部南側では、人頭大の方形礫（台石？）が出土しており、石器群との関連を示唆している。

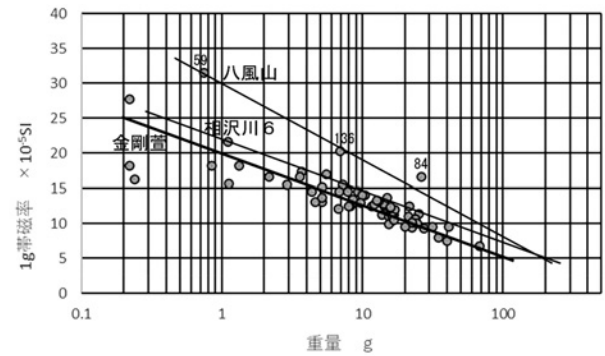


第7図 金剛萱遺跡林道地点の出土遺物の空間分布図

無斑晶質安山岩の原産地推定

無斑晶質安山岩は、磁鉄鉱を多く含むため磁性が強い特徴がある。この性質に着目し、石器の重量と帯磁率を測定し、1 g 帯磁率を求めることで、石器石材の原産地を推定することができる（中村 2021, 2024）。

第8図は金剛萱遺跡出土の無斑晶質安山岩製石器65点の1 g 帯磁率のグラフである。本遺跡の資料は帯磁率の集中度が良く、それらの平均は1 g の時の1 g 帯磁率 $=20 \times 10^{-5} \text{SI}$ を通る直線になる。八風山と荒船山相沢川6のサンプルの直線を、補助線として加えてある。これまで金剛萱の石器は、20 km程



第8図 金剛萱遺跡の石器の1 g 帯磁率
補助線：八風山，荒船山相沢川6サンプルの1 g 帯磁率

北東方の八風山起源と考えていたが、中村（2024）で全国のサヌカイト-安山岩原産地の帯磁率を集計する中で、荒船山相沢川のデータも取り扱った結果、金剛萱遺跡の石器と比較する必要を認識した。八風山の1 g の時の1 g 帯磁率 $30 \times 10^{-5} \text{SI}$ で、荒船山相沢川は $22 \times 10^{-5} \text{SI}$ 前後であり、後者に一致することが判明した。

なお、No.84, 136, 59の3点は、八風山に一致する1 g 帯磁率を示す。この3点は八風山原産か、あるいは相沢川の6以外のものに由来するのかは、未検討である。

鎭川支流の相沢川では、荒船山起源と思われる無斑晶質安山岩の大礫が多く分布している。1 g 帯磁率の値が大きい石材も多くあり、7サンプルを測定した中では、金剛萱遺跡に近似するものは相沢川6だけであった。このため、金剛萱遺跡の石材は荒船山の中でも別の沢で採集されたものかもしれない。

金剛萱遺跡第16回調査の意義

2024年発掘で2011年以来取り組んできたこの地点の遺物集中区を掘り切ることができた。この遺物集中区は、暗色帯中に包含された無斑晶質安山岩の剥片を中心とするブロックである。剥片生産が集中的に行われていた石器製作場所であったと推定される。このブロック内の遺物は、ほぼ無斑晶質安山岩に限定されること、打面調整があまり行われず、平坦打面によるやや厚めの幅広ですぼまりの剥片剥離がおこなわれていること、定型的な石器完形品がみられないことなどの特徴がみられる。

金剛萱遺跡の主な石器群を第9図に示す。第9図の1～6は3組の接合する折断剥片である。薄い剥片で、鋭い縁辺を台形様石器の用途に利用したものと思われる。7, 8は尖頭形の剥片で、香坂山遺跡の石器群につながるものである。9～13は台形状の剥片である。尖頭形の剥片と台形状の剥片はともに金剛萱遺跡に多く見られるもので、目的的に剥離されたものと考えられる。さらに、14の局部磨製石斧がこれらに伴う。

発掘終了後、遺物の接合作業を行った結果、全出土資料の1/4の約70点が接合することが確認された。接合資料の概要については、両角ほか（2025）を参照されたい。そして、大半の遺物は荒船山産の無斑品質安山岩を素材としたと推定される。この石材は、八風山のものと異なり、流理方向と並行に数センチ間隔で節理や小さな断裂面を多く含むことが特徴である。この制約があるため、断裂面と断裂面の間を亀甲状に水平に剥離が多く行われたようである。

金剛萱遺跡では、旧石器時代の生活面がとらえられ、その層位的位置はAT下位の暗色帯中のYt-pm4に対比される軽石の層準と推定できた。この地層は、約20 km北西方の長野県佐久市の香坂山遺跡（国武ほか 2021, 2022）の主要な遺物包含層と共通するものである。また、佐久市立科F遺跡（須藤編 1991）もこの層準に当たる。佐久市立科F遺跡では、二次加工が明瞭でない台形剥片（素刃石器）と多様な剥片を含む石器群である。金剛萱遺跡の石器群には、香坂山遺跡で確認される大型石刃・小石刃を明確には伴わないことから、ユーラシア大陸IPU（初期後期旧石器時代）の系譜にある香坂山石刃石器群に後続する立科F遺跡の初期台形様石器群に属するとみられる。初期台形様石器群は、武蔵野Xb層に代表され、日本列島の各地に確認される後期旧石器時代初頭の所産とみられる。

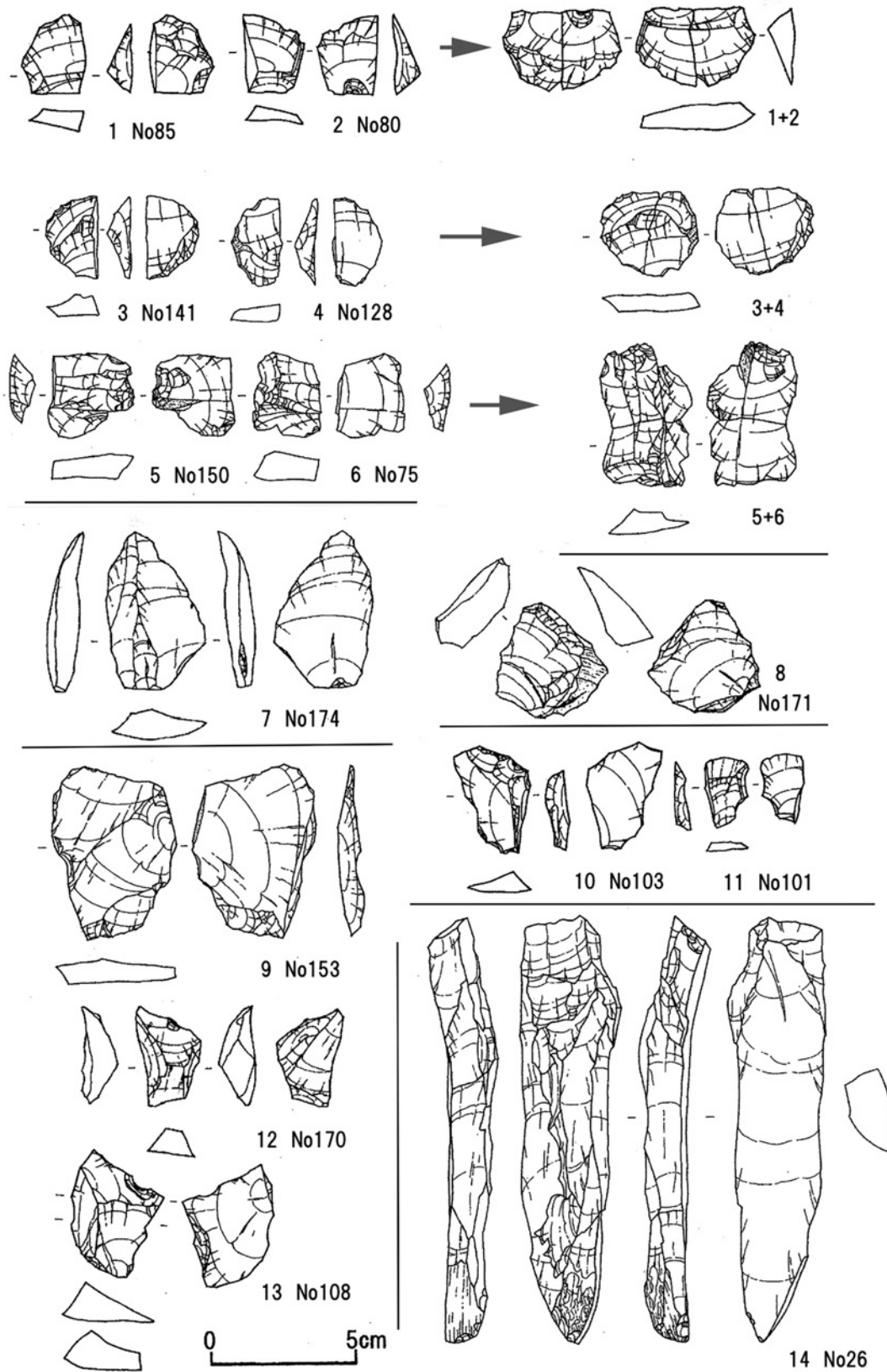
謝 辞

調査にあたっては、地主の泉 英明 氏、うず潮レーシングの福本敏夫 氏、青倉の神戸 求 氏には大変お世話になった。下仁田町教育委員会と下仁田

町自然史館には、指導・協力をいただいた。また、本稿は2名の査読者によって改善された。これらの方々に記して感謝する次第である。

文 献

- 大規模地すべり研究会（2016）地すべりによる金剛萱遺跡の平坦面形成。下仁田町自然史館研究報告, 1, 25-36.
- 関東火山灰グループ（2009）群馬県甘楽郡下仁田町でみつかった下仁田ローム層の砂粒組成。群馬県立自然史博物館研究報告, 13, 87-93.
- 国武貞克・須藤隆司・堤 隆（2021）日本列島最古の石刃石器群の構成とその起源。旧石器研究, 17, 125-146.
- 国武貞克・須藤隆司・中村由克（2022）香坂山遺跡の立地と遺跡構造。旧石器研究, 18, 101-112.
- 金剛萱遺跡研究会（2016）金剛萱遺跡の旧石器・縄文文化。下仁田町自然史館研究報告, 1, 1-20.
- 金剛萱遺跡研究会（2017）金剛萱遺跡の旧石器2－2015・2016－。下仁田町自然史館研究報告, 2, 51-58.
- 金剛萱遺跡研究会（2018）金剛萱遺跡の旧石器3－2017－。下仁田町自然史館研究報告, 3, 23-26.
- 金剛萱遺跡研究会（2019）金剛萱遺跡の旧石器4－2017・2018－。下仁田町自然史館研究報告, 4, 37-44.
- 金剛萱遺跡研究会（2020）金剛萱遺跡の旧石器5－2019－。下仁田町自然史館研究報告, 5, 27-34.
- 金剛萱遺跡研究会（2021）金剛萱遺跡の旧石器6－2020－。下仁田町自然史館研究報告, 6, 55-60.
- 金剛萱遺跡研究会（2023）金剛萱遺跡の旧石器7－2022－。下仁田町自然史館研究報告, 8, 27-32.
- 金剛萱遺跡研究会（2024）金剛萱遺跡の旧石器8－2023－。下仁田町自然史館研究報告, 9, 27-36.
- 金剛萱遺跡研究会「下仁田自然学校文庫8」編集委員会編著（2014）金剛萱に旧石器時代をさぐる－金剛萱遺跡と下仁田ローム層－。下仁田自然学校文庫8, 56.
- 両角太一・金剛萱遺跡研究会（2024）金剛萱遺跡の旧石器文化。地学団体研究会第78回総会（つくば）講演要旨集, 88-88.
- 両角太一・金剛萱遺跡研究会（2025）金剛萱遺跡における剥片剥離プロセス。下仁田自然史館研究報告, 10, 7-16.
- 中村由克（2021）帯磁率によるサヌカイト・無斑品質安山岩の産地推定法。資源環境と人類, 11, 41-55.
- 中村由克（2024）石器石材に利用されたサヌカイト・安山岩－帯磁率による原産地推定－。地学団体研究会第78回総会（つくば）講演要旨集, 90-90.
- 野口智輝・金剛萱遺跡研究会（2024）群馬・金剛萱遺跡の第16回発掘調査。地学団体研究会第78回総会（つくば）講演要旨集, 89-89.
- 下岡順直, 国武貞克, 早田 勉, 大石雅之, 須藤隆司（2023）北八ヶ岳横岳火山を起源とする八ヶ岳新期第4テフラ（Yt-Pm4）の噴出年代。第四紀研究, 62, 159-163.



第9図 金剛萱遺跡林道地点の主な出土遺物集成

須藤隆司編（1999）「立科F遺跡」佐久市教育委員会，99.
須藤隆司（2021）大陸系石刃技法と石刃技術の日本列島
化：香坂山遺跡と八風山Ⅱ遺跡の関連性．国武貞克編
「中央アジア旧石器研究報告第7冊 香坂山遺跡2020年発
掘調査報告書」，164-173.

村健一，寺尾真純，中井 均，中塚博子，中村由克，野口
智輝，深沢哲治，両角太一，角田真也 以上19人

執筆分担

「出土した遺物」，第6図，第2表：野口智輝
「遺物の空間分布」，第7図：両角太一
「無斑晶質安山岩の原産地推定」，第8図：中村由克
それ以外：中村由克，須藤隆司，両角太一，麻生敏隆，小
林忠夫，小林雅弘，斉藤尚人，竹村健一

調査参加者

麻生敏隆，今井 洋，今井よし子，岩井裕子，岩崎正春，
小林忠夫，小林雅弘，小林康夫，斉藤尚人，須藤隆司，竹

抄 録

フリガナ	コンゴウカヤイセキノキュウセッキブンカ				
書 名	金剛萱遺跡の旧石器文化9－2024－				
副 書 名					
シリーズ名	下仁田町自然史館研究報告				
シリーズ番号	第10号				
編 著 者 名	金剛萱遺跡研究会				
編 集 機 関	下仁田町自然史館／370-2611 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1				
編集機関所在地	370-2611 群馬県甘楽郡下仁田町青倉158-1				
発 行 年 月 日	2025年3月31日				
調 査 期 間	2024.4.26～30				
調 査 面 積	9m ²				
調 査 原 因	学術調査				

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地			地町村 コード	遺跡 番号	北 緯	東 経
コンゴウカヤイセキ 金剛萱遺跡	グンマケンカンラグンシモニタマチアオクラコンゴウカヤ 群馬県甘楽郡下仁田町青倉金剛萱1031番			10382	54	36度10分53.5秒	138度46分55.2秒
	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			
	散布地	旧石器時代		剥片，石核			

(要 旨)

金剛萱遺跡研究会（2025）金剛萱遺跡の旧石器文化9－2024－．下仁田町自然史館研究報告，10，
17-26.
下仁田町青倉の金剛萱遺跡林道地点で，2024年に第16回発掘調査を行ない，2011年以来の調査が
終了した．一連の調査で後期旧石器時代前半期の剥片など35点が出土した．遺物集中区がほぼ確認
でき，無斑晶質安山岩を持ち込み剥片生産が集中的に行われていた石器製作場所であったと推定さ
れる．二次加工が明瞭でない台形剥片（素刃石器）を主体とするもので，佐久市香坂山遺跡のすぐ
後に位置づけられる後期旧石器時代初頭の石器群とみられる．この遺跡に持ち込まれた荒船山産の
無斑晶質安山岩には，縞状の小亀裂や節理が多く含まれることで，その方向に沿って薄い剥片をは
がす技術適応を行っていたことが判明した．